

# クロマグロ減 葛西が救う？

## 水槽内の人工産卵法確立

「黒いダイヤ」とも呼ばれ、捕獲で数が減っているクロマグロ（本マグロ）を水槽内で人工産卵させる方法を世界で初めて東京都立葛西臨海水族園（江戸川区）が確立した。飼育中のクロマグロが昨年、今年と二年連続で産卵し、一匹が約六ヶ月まで成育。さらに大きく、数多く育てられれば海への放流などが可能となり、将来は「葛西生まれのトロ」が食卓にあがりそうだ。

### 臨海水族園、世界初

直径一ミリの白い卵をり出した。現在の飼育数は約七メスに、数匹のオスが十匹。最初の産卵が確認されたのは九九年だ。なぜか翌年以降は音さたなし。数年がかけほぼ毎日、水族園の大水槽でクロマグロの産卵が繰り返され、約十年ぶりに産卵に成功した。

今年四月から七月にかけてほぼ毎日、水族園の大水槽でクロマグロの産卵が繰り返され、約十年ぶりに産卵に成功した。数匹のメスが、一般見学者の目の前で一日あたり計約百五十万粒を産み落とした。

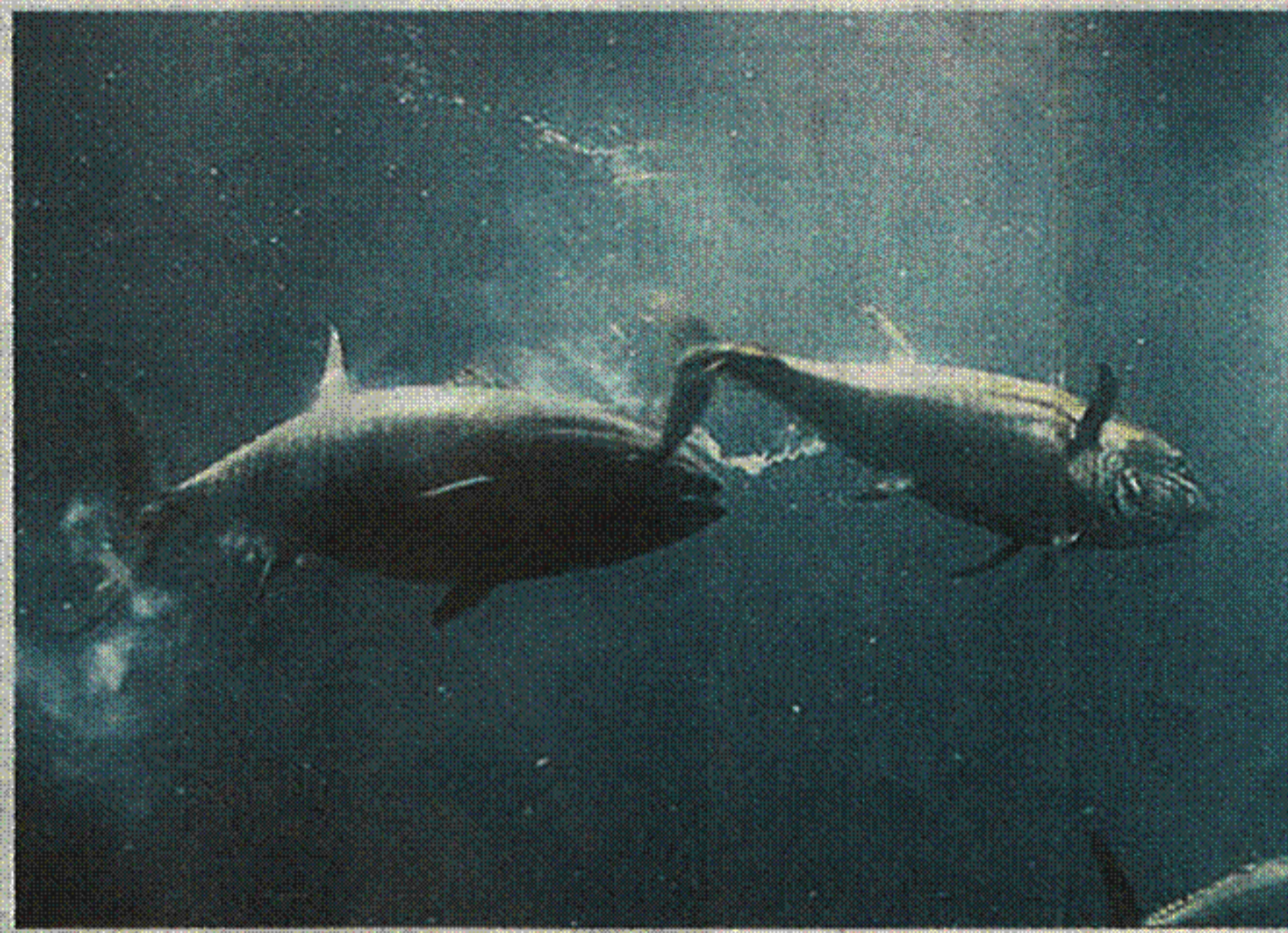
水族園は一八九九年、開園の目玉として世界で初めて水槽内でマグロの長期飼育に乗り組ませるまでには、水温や光の調節など、さまざまな条件を

## 課題 アップ 生存率

態を編み出した。自然界の産卵期は春の一カ月間といわれており、数カ月にはわたって産卵し続ける現象は、生態を解明する上でも貴重な。現在、特許を申請している。

ただ、これまでは産卵してふ化しても、数日以上死んでしまえば、養殖場へ移すのは数%。今年は一匹が六・三ヶ月まで大きくなったが、八月十日に原因不明で死亡した。水族園と共同研究している東大大学院新領域創成科学研究科の木村伸吾教授によると、ふ化したばかりの仔魚は、特定の水温でしか生き残れないことが分かっていた。エサとなるプランクトンの与え方も成育に影響を与える。

ただ、これまでは産卵してふ化しても、数日以上死んでしまえば、養殖場へ移すのは数%。今年は一匹が六・三ヶ月まで大きくなったが、八月十日に原因不明で死亡した。水族園と共同研究している東大大学院新領域創成科学研究科の木村伸吾教授によると、ふ化したばかりの仔魚は、特定の水温でしか生き残れないことが分かっていた。エサとなるプランクトンの与え方も成育に影響を与える。



クロマグロの産卵の様子。卵をまくメスを追いかけるオス＝葛西臨海水族園提供

木村教授は「生き残